

A SUITABLE JOB FOR A WOMAN

ヴァル・マクダーミッド

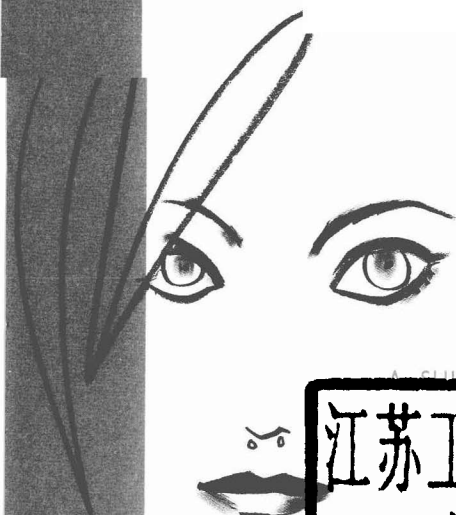
高橋佳奈子／訳

# 女に向いている 職業

【女性私立探偵たちの  
仕事と生活】



朝日新聞社



A SUITABLE JOB FOR A WOMAN

江苏工业学院图书馆  
藏书章

女に向いている職業

女性私立探偵たちの仕事と生活

## 女に向いている職業——女性私立探偵たちの仕事と生活——

---

1997年11月5日 第1刷発行

著 者 ヴァル・マクダーミド

訳 者 高橋佳奈子

発行者 川橋啓一

発行所 朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地5-3-2

電話 03-3545-0131 (代表)

編集・書籍編集部 販売・書籍販売部

振替 00100-7-1730

印刷所 共同印刷

---

©Kanako Takahashi 1997 Printed in Japan

ISBN4-02-257193-4

\*定価はカバーに表示してあります

目

次

プロローグ

もじゃもじゃの毛も……

11

1 きっかけは

12

アメリカン・ナイトメア

33

2 同じ言葉を話していても

37

キャリア・ケース

52

3 最初の仕事

58

間一髪

74

4 ワンダーウーマン

77

心のバランスを……

102

5 大の男を相手にして

104

ささやかな甘い思い出

113

6 仕事について

115

形見として……

151

7 射撃練習

153

一度なら不運と言うけれど……

170

8 犯罪の要素

174

|    |                    |     |
|----|--------------------|-----|
|    | チャールズ皇太子とは……       | 193 |
| 9  | スパイとして……           | 196 |
|    | ……一度も母と呼ばれずに       |     |
| 10 | 人間的な部分             | 218 |
|    | まさにはびつたり……         | 238 |
| 11 | 潜伏して               | 242 |
|    | 真実、正義、そしてアメリカン・ウェイ | 252 |
| 12 | 法組織との関係            | 259 |
|    | よき隣人は愛される          | 274 |
| 13 | テクノ、テクノ、テクノ……      | 278 |
|    | 遺言がある場合は……         | 291 |
| 14 | 女性への暴力に立ち向かう女性     | 295 |
|    | レネとアンナのすばらしき冒険     | 307 |
| 15 | 仕事の影響              | 312 |
|    | 奴隷貿易               | 327 |
| 16 | 事実は小説より奇なり         | 329 |
|    | 解説 穂井田直美           |     |

装 画    山田勝誉  
装 幀    Zephyrus

女に向いている職業

——女性私立探偵たちの仕事と生活——



A SUITABLE JOB FOR A WOMAN: Inside the World of Women Private Eyes

by Val McDermid

Copyright ©1995 by Val McDermid

Japanese translation published by arrangement with  
Val McDermid c/o Gregory & Radice Authors' Agency  
through The English Agency (Japan) Ltd.

ダイアナ・ミューアに

その友情と助力、

また、誠実であること、正確であること、  
ジャーナリストにとつてどんなに大切な  
常々思い出させてくれたことに

ついでにアルコールが

## 謝 辞

この本のアイディアが最初に話に出たのは、ロンドンのある夜のパーティだった。酒の席にありがちな思いつきのなかで、これだけはしらふに面白そうだった。アイディアを形にするにあたっては、多くの人々から寛容で忍耐強い援助や支援を得、貴重な時間、知識を分けていただいた。それなくしては本書をものすることはできなかっただろう。多くの方々のなかで、大事な人を失念してしまうかもしれないが、あらかじめ深くお詫びしておく。まず、私にその生活を垣間見することを許してくれ、寛大に時間を割いて専門知識を分け与えてくれたすべての女性私立探偵たちに感謝したい。特にジーナ・スコット・アーチャーに。イギリス探偵協会という聖域に招き入れてくれ、私のために自身のアドレス帳を開いてくれたことに対して。彼女の助けなくしては、この本が日の目を見ることはなかったかもしれない。次の方々にも言葉で言い表せないほどの貴重な協力をいただいた。ジャネット・ルドルフ、ダイアナ・ミューア、ケイト・マッツ、キャロル・アンドラス、プリシラ・リッジウェイ、エドナ・ブキャナン、ジャネット・ドーソン、ロレイン・ペティ、クリス・ハンフリーズ。また、テープを原稿におこすという苦役に文句一つ言わずに耐えてくれたミッシェル・デュークに感謝する。

メアリー・ウィングズ、スー・グラフトン、ミネット・ウォルターズ、サラ・バレットキーには特別の謝意を送りたい。みな、私が慣れ親しんだ寢床から遠く離れた地にあるときに、地獄のモーテルから救って温かくもてなしてくれた真の同志たちだ。

私がパニックに襲われたときに手を握ってしてくれた友人たちに永遠の感謝を。特に仕事の領域をはるかに超えて忍耐強かった編集者のヴァル・ハドソンとBBに深く感謝したい。

## プロローグ

初めて女性が主人公の探偵小説を読んだのは、まだ全国紙の追跡調査記者をしている頃だった。探偵には自分と相通ずる点が数多くあるように感じた。どちらも真実と、公的機関には期待できない種類の正義を求めて行動している。目的を達するのに必ずしも正統とはいえない手段を用い、ほとんどコネとうまく人の信頼を得て話を聞き出す能力だけに頼っているところも同じだった。また、こうと決めた結果を得るためには粘り強く、危険もいとわないが、時には期待はずれの結末に甘んじなければならぬところまで。

しかしあの本——サラ・パレツキーの『サマータイム・ブルース』——を読んで私は気づいた。答えを求めて危険な街角を徘徊する実在の女探偵たちとジャーナリストの私を結ぶものがある一つあることに。小説や映画ではどれをとってみても——『大統領の陰謀』から『フロント・ページ』に至るまで——現実をフィクションにする際にどうしても歪曲されるところが出てくる。まず削られるのは退屈な部分だ。長時間に及ぶ実りのない張り込みや、調査を進めるのにどうしても必要な一本の電話を待って、指で机を叩き、煙草をひつきりなしに吸いながら過ごす日々。見当違いの尾行や空振りの手がかりに時間を無駄にする苛立ち。フィクションの中でそれが描かれることはない。当然だろう。実際経験してもうんざりすることを、小説や映画を通して追体験するほど辟易することはないのだから。

ら。従つてフィクションの世界で描かれるのは、どうしても選りすぐりの場面にならざるを得ない。

マンチエスターを舞台に活躍する、早口でキックボクシングとコンピュータの天才ケイト・ブラニガンを初めて世に出すにあたっては、私も現実を曲げて書いたのは間違いない。小説や映画に描かれるほどジャーナリズムの真の姿は華やかじゃないと友人にうそぶいていたにもかかわらず。しかしそのときは自分に——いや、耳を貸してくれる人なら誰にでも——こう言つたものだ。私が書くこうとしているのはテンポがよく、入り組んだ犯罪小説であつて、ドキュメンタリーではないのだからと。

といつてもやはり、私の想像の産物と、現実其他人の人生を変えてしまうような仕事をしている実在の女探偵のあいだに、どれほどの違いがあるのか考えずにはいられない。ケイト・ブラニガンについて書けば書くほど、もう一方の実在の女探偵にも興味を引かれていったのだ。

四年前、私はジャーナリストを辞め、犯罪小説の作家を専業とするようになった。それなのに東の間ジャーナリストに戻り、キンジー・ミルホーンやケイト・ブラニガンが実在するものか探つてみたいという気持ちには抗えなかつた。これから始まるのはそんな探求の物語だ。

もじゃもじゃの毛も……

法的な文書を受け取ると、みんなちよつとばかりかつとなつてしまふのね。サウス・オッケンデンに住む男に令状を送達する仕事があつたの。家のドアをドンドン叩いたら、ようやくドアを開けてその男が姿を見せたわ。七フィートもあるんじゃないかと思う身長に、それにみあう体格をしていた。大きな男だつたわね。しかも風呂呂に入っていたらしく、腰にタオルを巻きつけただけの格好だつた。令状を渡すと、その男、頭から火を噴いたわ。文字どおり怒りのあまり飛び上がったの。そしたらタオルが落ちちゃつた。そのうち近所の人みんな見物にきて、わたしは真面目な顔をしてるのが辛かつたわ。男はわたしのあとを表まで追つてきて、まさに怒りのあまり芝生の上で踊り狂つたの。何もかもがゆっさゆっさ揺れてたのよ！ あれほど大きな男じゃなかつたら、そんなにおかしくなかつたかもしれないけど、アレも体にあわせて特大だつたもんだから、すべてがぶらんぶらんつてわけ。もう耐え切れなくなつて大笑いしちゃつた。近所の人もみな抱きあつて笑つてたわ。その後追加の文書を渡しに行かなくちゃならなかつたときに、その男は怒りに駆られたことをあやまつた。でもサウス・オッケンデンに行くと思わず、家のまえの芝生でまっ裸で踊り狂つてた男の姿を思い出して、どんなに憂鬱な日でも思はず頬がゆるんでしまうの。

ダイアナ・ミドルトン——ホーンチャーチ、エセックス

## 1 きっかけは

子供の頃から私立探偵になるのが夢だった人なんているのかしら？ みんな違う職業からこの世界にころがり込んだ人間ばかりじゃないの。

ブレア——パークリー、カリフォルニア

探偵になりたいという熱い思いなんて抱いたこともないわ。実際なろうと思うならそれも必須条件の一つじゃないかしら。眼に星なんか浮かべてたらだめよ。この稼業が華やかで素敵なものだろうと思って始めたら、きつと幻滅するに違いないから。

ジーナ・スコット——アーチャー——リヴァプール

「私立探偵になることは考えた？」という言葉が進路相談の教師の口から出ることは決してないだろう。賭けてもいい。それは探偵のイメージのせいもあるかもしれない。みすばらしい中年男で、常に飲酒の問題を抱え、銀行の預金残高もあやうい情緒欠陥者。それとも有能な探偵になるには作家と同じで、その道の専門家としてできるかぎり多くの人生経験を積まなければならないからだろうか。もしくは単に探偵はキャリアを積み重ねていく職業ではないからと言ってもいいかもしれない。大学で専攻し、企業に入って出世階段の一番下の段からよじのぼって行けば、末はV・I・ウォーシヨースキーになれるというものではないのだから。

小説の中の女私立探偵からも就職ガイダンスはあまり期待できない。ほとんどが警察などの法の執行機関では異端児であり、自己の信念や気性のせいでのその枠内にとどまっていられず、探偵という職業にころがり込んだ人間ばかりだからだ。サラ・パレツキーのV・I・ウォーショースキーは弁護士だったが、自分も同僚も、まわりで社会がこなごなに崩れ落ちようというときに、小さなひび割れを隠すために壁紙を貼るだけの仕事をしているのだと思うようになった。つまり司法制度、ひいては権力に格好の餌食として外へ向けて利用されているにすぎないと。リンダ・バーンズのカーロッタ・カーライルは上司にこびへつらうことのできない警官だったし、スー・グラフトンのキンジー・ミルホーンは保険の調査員だったが、あまりに過激な行動のため、企業の中にとどまっていられなかった。そしてサンドラ・スコペトーネのローレン・ローランがFBIを辞めたのは、撃ちあいで誤って恋人を殺してしまったからだ。

現実の世界で探偵となった異端児たちは、さらに幅広い職業からもっと様々な動機によって身を転じていた。私が話を聞いた三十四人の女性のうち、ちょうど半分が偶然探偵になったのだという。ふと頼まれた仕事が入った人もいれば、経済的な理由による人もおり、政治信念や、自分の属する組織に対する失望からという人もいた。残りの半分のうち三分の一はもと警官で、三分の一は探偵の事務員をしており、あとの三分の一は家族が探偵業とつながりのある人だった。

たった一人、社会に出てすぐに探偵になった人物がいた。私がつくり出した女探偵ケイト・ブラニガンのように、レネ・オルソンも学資を稼ぐ必要があった。ケイトは探偵事務所でアルバイトを始め、レネは警備会社を選んだ。どちらにとっても探偵の仕事は、笑ったりセックスしたりせずにか



つてない楽しみを得られるものに思えた。それで二人とも私立探偵となったわけだが、レネはケイトより若干用心深く、一応その前に社会学の学位をとった。

めったにそういうことをする人はいないのだが、レネは履歴書をいくつかの探偵事務所に送りつけた。みなレネの経歴には感心したものの、探偵になるには若すぎると判断された。しかしある探偵事務所が彼女にチャンスを与えた。

「すぐに雇ってはくれなかったわ。でも事務所のボスがわたしのことをとても気に入って、いつでも連絡が取れるようにしておきなさいって言ったの。だから、『何を勉強しておいたらいいんでしょう。雇ってもらえる人材になるにはどんなことを学んだらいいか教えてください』って頼んだわ。それからボレックスの古い巻き上げ式十六ミリカメラのことを調べなさいなんて言うのよ！理由なんてわかるもんですか。わたしは図書館に行つてできるかぎりのことを調べて報告書を作成したわ。ボレックスのカメラについてはこの世で知り得るすべてについてね！ボスはいたく感心してたけど、わたしはまた別の課題をくれと頼んだの。それを毎週毎週四カ月も続けたかしら。調べたのは全部奇妙なことばかりよ。しまいにはウインザーも——ボスのことだけど——『今度は実際の仕事をしてみようことにするよ』って言った。

仕事というのは、ある人に何かの企画をもちかけて多額の投資をさせようとしている男の身元調査だった。わたしはその男が過去に信用詐欺を働いた前科があるのを探り出したわ。聞けるだけの人から話を聞き、思いつくかぎりの場所に行つて調べた結果だった。この男についてのありとあらゆる公的な記録を調べて、ついにはウインザーに二十七ページに及ぶ報告書を提出したんだけど、彼、引っ